



# 動物図鑑4

ナメコ佐竹やふろう

父が死んだ。山奥の渓流にイワナを釣りに行って、岩場から足を滑らせたのだという。その瞬間を目撃した父の知り合いだという男は律儀な人だった。残された遺族にその一部始終をできるだけ正確に伝えることが自分の責務だと考えているらしく、妙な細部へのこだわりに加えてみずからの感想や憶測を織り交ぜた無駄なくわしさで父の死の顛末を長々と物語った。

いつも腕にキラキラ光るごつい腕時計をはめていた父……アウトドアなどには興味を示したこともなかったあの父が、釣りなんかしてたってことがオレには意外だった。もっとも、この数ヶ月のあいだ、オレは父と顔を合わせてなかった。これまでだって、父はたまにしか家に寄りつかず、オレにとってはもう他人と身内のあいだみたいなものだったが、正月の前あたりから父はずっと家をあけ続けていたのだ。それが、釣り？……長い父の不在を、母はいつも「お仕事よ」の一言で片づけたが、そのくせ父の友人と名乗る男たちが数人、正月に家にやってきた。彼らはまるで家族みたいに、いやオレの印象では家族以上になさけ遠慮なく大いに飲み食いしていったのだった。そもそも、友人が大勢来ているというのに肝心の父がいないことはどう考えても変だったが、母を含め、オレ以外の人間は誰もそんな些細なことは気にもかけない様子だった。母も父の友人たちも、まるで同窓会で出会った幼なじみのように楽しそうだったし、だからオレも、ついいつられて一緒にさわいでしまったのだ。

父の遺体が家に戻ってくると、またオレの知らないやつらが家に大勢押しかけてきて、勝手に——とオレには感じられた——父の葬式を始めた。もっともオレもそれを止めようとしたわけじゃないけれど。そしてそのやけに盛大ながらどこかそらぞらしい葬式のあいだ、やつらは客間にこもり、母も一緒にやら話し込んでいた。そしてやがて客間からぞろぞろと出てくると、用意していた食べ物も食べずにみなさっさと帰っていった。

次の日、斎場で火葬をすませると、オレはようやく母と二人っきりになった。父の遺品を整理しようというとき、母が突然オレに秘密を明かした。

「お父さんは総会屋だったんだよ」

そう言って、これまで見たことのないような、ちょっと得体の知れない据わった目で母はオレの顔を見た。

「総会屋……？」

「会社の弱みをつかんで金をゆすり取る、あの総会屋さ。無理に金を借りたり、借金を棒引きしてもらったりするのよ。まあそのほかにもいろんな物を買ってもらったり、仕事をもらったりすることもあったけど……社内報の編集とかね。もちろんあの人人が自分で編集するんじゃなくって、みんな孫請けに丸投げなんだけど……ようするに、そうやってお金を恵んでもらってたってことよ」

「母さんはそのことをずっと前から知っていたの？」

「もちろん。私は昔、あの人人がゆすりに来ていた会社で受付嬢をやってたの」、母は昔を懐かしむような口調で言った。

「そんなこと、今まで一度も言わなかったじゃないか」

「そうねえ、それはやっぱり、子供だったから、遠慮してさ……」と母は口を濁した。「ほら、お前ももう十八でしょ？本当のことを知りたいんじゃないかと思って……」

「唐突すぎるよ……親父はただの勤め人だって言ってたくせに……」

だが本当は、オレはそのことをずっと疑ってた。何か変だとは感じていたのだ。でも親たちは本当のことを隠そうとしてるみたいだったし、強いて問い合わせることもなかったのだ。

母は三百万円の札束をポンとテーブルの上に置くとオレに言った。

「お前ももう大人なんだから、これからは自分でなんとかやっていってね……残念だけど、ここにあるお金が最後で、これ以上は何もしてあげられないの……実はお父さんがうちこちに借金してねえ、この家も抵当に取られてるから、私も市営のアパートに引っ越そうと思うの……いいえ、心配しなくってもいいのよ。私は自分でなんとかやっていくつもりだし、それに、そうじゃなくてもこの家は私一人には広すぎるわ……」

卒業まで半年を残して高校を中退したオレは、やることもなく毎日地元の街をうろついた。ある日、天井が高いロフト風のこじやれたカフェに「経営者募集」という張り紙が貼ってあるのを見つけた。三百万円で店の権利を、店舗も含めて、すべて譲渡するという。書かれていた番号に電話をかけると、今はやりの形の眼鏡を掛け、若づくりした格好の五十台の男が五分で現れて、「こっちです」とオレを案内した。

「この店じゃないんですか？」

「こことは別の店です」

男は繁華街を突っ切るようにしてどこまでも歩き続けた。駅前を通り過ぎ、大通りをいくつも北に渡り、やがてオレたちは場末の通りにやってきた。周囲に見えるのは、古くて小さい雑居ビル。小汚いラーメン屋。金券ショップ。演歌のカセットを売る店。「国際結婚・相談に乗ります」の看板のあるアジア諸国の歌手や俳優のプロマイドの店。ポスターでブロックされて店の中が見えない貸しビデオ屋。すっかり時代に取り残された金物屋。コインランドリー。まるで銭湯のようなラブホテルに、ラブホテルのようなクリニック……悪い予感がした。

ほとんど住宅地のように見える寂れ切った商店街の一角にその店はあった。雲霞のように胡散臭さの立ちのぼるその店は、黒いフィルムを張ったガラス窓に包まれていた。コカ・コーラのロゴがプリントされた丸い取っ手を引いて中に入ると、昔のヤクザ映画に出てきそうな、暗い光に満ちたラウンジ・バー風の作りになっている。比較的明るいカウンターの周囲を覗くと、店の中の大半のスペースにはモコモコとした生地の野暮ったいソファーや観葉植物つきの仕切り、それに橙とか紫とか変な色のシェードがついたフロアランプなどがゴタゴタと迷路のように置かれていて見通しが利かない。

しかしながら、三百万を即金で払い、オレはその日からその店に寝泊まりすることにした。店を開けるのは九時から夜の八時までのつもりだったが、すぐに「フレックスタイム」になった。というのも、まあ最初から予想していたことではあったけど、客層の問題があったからだ。いうまでもなく、カタギの客なんて一人もやってこなかった。来るのは近くに事務所を構えるヤクザばかり。特に鮫島というボクサーのように鼻の曲がった男と、その子分らしき若いやつらが頻繁に店を利用した。彼らはほとんど一日中そこでだらだらと時間を潰していた。ソファーに横になって堂々と昼寝をする。ときどき起きて何かの見回りや集金に出かけていく。そして夜になるとオレさえも無断では踏み込むことのできない観葉植物の仕切りに囲まれた奥のブースで花札やら麻雀やら。鮫島も時々やってきて、奥のブースで作戦会議らしきものを開いている。夜中過ぎに四、五人でやってきては集まってどこかへ出かけていくこともある……

どうせ夜はオレはレジのうしろのベンチで寝ているし、彼らは勝手に飲み物を入れて飲むと、その分の金をレジの上に置いていってくれる。鮫島は子分たちによく言っておいてくれたし、金にまつわるトラブルはなかった。ちょっと買い物や銭湯に出かけるときには子分のだれかに店番を頼んでおけばよかった。

ある日、彼らはどこかから「C L O S E D」と書かれた札を持ってきて勝手に店のドアに掛けた。別にかまいやしない。ようするにオレの喫茶店はほとんど鮫島たちの組事務所の分室だった。その方が安定した身入りが保証されるってもんだった。やがてオレは彼らの賭け麻雀にも参加するようになり、たちまち鮫島に借金を五十万ほど作った。

ある日、鮫島が女を一人連れてきた。鶴田という名前の、黒っぽくどこか寡婦めいた服を着た、神経質そうで暗い顔つきのオレと同年代の女だった。女は自称画家で、アルバイトの先を探しているという。ちょうど留守の時の自分の代わりが欲しいと思っていたので店で働いてもらうことになった。

鶴田はすぐに鮫島の子分連中となじんだ。彼らの指定席になっているソファーに足を組んで座り、首だけを超然と伸ばした鶴のような格好で煙草の煙を長々と吹かすのが彼女の日課となつた。用事があつて彼女を呼ぶと、ゆっくりとその長い首を回し、眠たそうな目をこっちに向ける。店員だか客だかわかったもんじやない。

朝の早いうちは暇でなにもすることがなかつた。オレと鶴田はトランプであらゆるゲームをやつた。それから鶴田が古本屋で手品の本を買ってきて、オレたちはその本にのつてゐるネタを最初から順番に練習し、互いに披露し合つた。

やがて鶴田が人生全般に対して感じているらしい気だるさのようなものがオレにも感染した。鶴田は人並み外れて柔軟な思考の持ち主だった。この新たな状況にも彼女は即座に適応し、まるで十年前からずっとこうして暮らしてたかのような落ち着きぶりを見せてゐた。鶴田はいつもその透き通るようなまぶたを半分閉じながら人の話を聞いた。そしてときどき犬がやるように、突然体のあちこちをその長い指で大雑把に搔いた。それは心底リラックスしているときの彼女の癖だった。

夜になるとフロアのあちこちに置かれたランプはどこか家庭的な温みを帯びてくる。それらが窓に反射して店の中は実際より何倍も広く感じられた。とうろう流しの暗い水辺にいるようだつた。そんなときは昔語りがしたくなつてきて、オレたちは子供のころに見た大人向けの渋いドラマた刑事もの話でもりあがつた。

「このトワイニングの缶を見ると貧乏学生だったころを思い出すわ。この薄レモン色の缶に油を入れて筆をよく洗つたの」

「どんな絵を描いてたの？」

「たいした絵じゃないわよ……意味のない排泄物。生活の濁みたいなもの。まあ消化にだって意味はないんだけど」

「オレは消化も排泄も嫌いじゃないけど」

「好き嫌いの問題じゃないわ、意味があるかどうかよ。私なんて、いてもいなくても同じだもの。意味のないことしかできない意味のない私の人生なんで虫けら以上に無意味よ」

鶴田は断定的にそう言うとテーブルをドンと叩いた。

「でも……描くのは楽しいんでしょ？」

「まあね」

「どんな絵を描いてたのか知りたいな」

「例えねえ」と鶴田は、ようやくかつての生き生きとした表情の片鱗らしきものを取り戻しつつオレに説明した。

その絵は三枚一組の屏風のようになつてゐる。天井の低い、窓のない、変な遠近法のかかった空間の中になかば人間、なかば動物のような何かが何匹か描かれているわ。そいつらはウナギの

ように長い首を持っていて、歯があるから噛むことはできるけど、その他の機能ははっきりしない。耳と口もあるけど、そのうち二匹には少なくとも目がない。一匹は包帯をされてる。左側にいるやつは女のような長い髪の毛を持ってる。真ん中のは羽をむしったダチョウのような形で立っていて、人間のような口を持ち、長く太いチューブ状の首の先端に、やはり包帯をされている。真ん中のやつから包帯を取るとこうなるだろうという姿が右側に立っているやつよ。そいつは口の付け根に大きな耳がついていて、顎をほぼ九十度の角度で開けることができる。その足は三本脚の椅子みたいで、芝生というより針山に似た地面の上に立っているの……

「はあ……」

「あなたの絵を描いてあげましょうか？」

その日からオレは暇になるとキャンバスの前に立ち、鶴田は鉛筆や筆を握った。

「絵にはあまりいい思い出がなくてね」とオレは話した。「小学校の三年のときだったけど、図画のクラスで、将来してみたい仕事を絵に描くというのがあってね。オレは父の絵を描いたつもりだった。派手なスーツや高級ホテル、外車、外国製の腕時計、それだけがオレが父の仕事について知っているすべてだったんだ。クラスの担任でもあった女教師は、質素な身なりをして、丸い眼鏡をかけてて、胸が大きくて、今から思えば服や髪型がソ連のプロパガンダ映画に出てくる若い女にそっくりでね。でも何が瘤に障ったのか、オレの絵をくそみそにけなすんだ。個性がないとか、既成の考え方囚われず、もっと自由に、自分が本当に感じたままに描いてください、とか言ってね。オレの教師不信はあの時から始まったんだよ」

鶴田はまぶたを半開きにしてオレの話を聞いていた。

「私、美大を出てからしばらく家庭教師をやってたの。受験生に絵を教えるんだけど、いつも生徒に嫌われちゃって、すぐにやめさせられたわ。それから食べなくなつて水商売をするようになったの。鮫島さんと知り合ったのもその縁よ。あの人、ああみえても昔は武闘派だったらしいけど、最近は組の中でも出世頭なんだって」

ある夜、オレが閉まりかけの銭湯から追い出されて店に帰ってくると、通路のまんなかに大きな肘掛け椅子がポツンと置かれていて、その上に完成した絵が立てかけてあった。縦が一メートル近い大きな絵で、まるで人が椅子に座ってるみたいだった。

「どう？」と女画家は微笑みながらオレにたずねた。

どうって……正直、それはオレをぎょっとさせる絵だった。背景は藤色で、横じまのセーターの上に灰色の作業着を羽織った人物が、白い歯をむき出しにしてこちらを向いている。何かを歯の間に噛んでいるように見える。長く太い首は鮮やかなオレンジ色で、そこだけがペリカンの喉の下の袋みたいに、やたらと目立っている。目はまるで重要ではないらしく何本かの重ねられた黒い線で簡単に描かれていて、耳はこげ茶色のクチャクチャと小さく縮こまつたしわにすぎなかった。小さな頭部に対して、額から斜め上に向かって伸びている黒い髪の量が多い。そのせいで頭の部分だけ見ると、まるでミイラみたいだ。アンデスかどこかの、頭蓋骨を抜かれて小さく縮んだ頭部のミイラ……どうって言われても、オレにはさっぱり分からぬ……

「これがオレ？」

「そう。これがあなた」

鶴田は自信たっぷりだった。そう断言されると、受け入れざるを得ない気もしてくるのだった。これがオレか……そう呟くうち、だんだんとその感が強まってきた。そう、たしかにオレだ、特にあの、首んところが……

「気に入らない？」

「いや……よし、さっそく額に飾ろう……」

店の一番奥のこげ茶色の壁の上に、用意しておいた金縁の額に入れてその絵を飾った。自分で描いたわけじゃないけど、壁に釘を打って絵をひっかけるとひさしぶりに何かをやり遂げた気分がした。オレたちは並んでしばらくその絵を眺めた。少し遠くからだと、その暗いランプに照らされた色合いが、どこもかしこも薄くホコリが積って時間の止まったような薄暗い店の雰囲気にぴったりだったので、オレはようやくその絵に少し満足した。鮮やかなオレンジ色の首の部分が、まるでそこだけ発情して腫れてるみたいだった。

それからオレはその絵の下のソファーで鶴田の黒いシャツをまくりあげ、胸をなめた。ストッキングを脱がそうとしたとき、ドアが軋んだような気がして、二人で頭を上げて店を見まわしたが誰もいなかった。オレは何だか白けてしまい、鶴田はそれを察したのか服を直すと煙草に火を点けた。

「ねえ、二人で旅行しない？各駅停車に乗って、降りたくなつた所で降りるの」

「いいねえ」

「でも箱根湯本には行ってみたいわ」

「どうして？」

「母の墓があるの」

だが店を閉めても大丈夫だろうか？鮫島たちは文句を言わないだろうか？月々の支払いは？借金は？……オレは自分が今の生活にがんじがらめになっていることを改めて感じた。そして言った。

「行こう。いますぐ行こう」

オレはレジの中の紙幣を全部つかみだして財布に入れると、カバンに服をつめ、鶴田の手を引いて店を出た。「C L O S E D」の札は裏返す手間もなかった。ガラスのドアにガチャガチャと鍵をかけ、暗い道を足早に歩いた。冷たい夜風に吹かれ、心は高揚していたけれど、いずれにせよ、今から思えばそれは何かから逃げだすための旅だったのだ。

二週間後、あてのない旅にすっかり頭が混乱し、くたくたに疲れて店に帰りついたオレがソファーに横倒しになっていると、そいつらはやってきた。

見るからに怪しげな三人組だった。まんなかの男は黒いトンボのサングラスをかけ、ペラペラの生地のシャツを着て、肩から背中にかけた部分が丸くカーブしているのが印象的だった。そいつだけはチビで、髪の毛が油にぬれたようにべつとりと光っていた。ほかの二人は逆にバスケットボール選手みたいに恐ろしく背が高く、手が大きくて、まんなかの男をとんでくるボールからガードするようにして立っていた。彼らは入ってくるなりいきなりカウンターの上にあった皿やカップやグラスを腕で一かき床に落したので、もろく哀れな食器たちは世界の終わりみたいなものすごい音を立てて床の上で木っ端みじんに割れた。

「何なんだ、あんたたちは？」

「私は鮫島に縁故のある者だよ。あなた、鮫島に借りた金、返したか？」

「もちろん……でも鮫島はしばらく店に来てないよ」

「それは知ってる。でもそのあとは？」

「そのあと？ だって、相手がいなけりや返しようがないじゃないですか」

「その考え方はよくなーい」と男は言った。「借金は貸し手がいなくなつても必ずどこかへ引き継がれる。あなた、そのこと知らなかつたか？」

うーんとオレが口ごもっていると、男は追いかぶせるようにして言った。

「借金を返さないと、抵当を取られる。これ常識ね。今回の場合、抵当はあなた自身。だから、琢磨から権利を引き継いだ男、あなた売つた。私、あなた買った。だからあなたは今は私のものね」

「オレにどうしろっつうの？」

「あなたには、ちょっと遠いところで働いてもらう」

男が合図をすると、左右の二人がオレを両側から挟みこみ、それぞれ腕を一本ずつ抱えるようにして店の外へと引っ張っていこうとした。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待つた！ 分かった、金は返すよ。この店は見てのとおり、今とでも儲かってるんだ。ハハハ……鮫島に借りた分ならすぐに返せる」

「借金は私、返した。あなた、返さなくていい。そのかわりあなた、私と一緒に来る」

「分かった、それじゃこうしよう。あんたがオレを買うのに払つた額の倍を、いや三倍、いや、もうこの店をまるごとあんたにあげるよ」

「あなた、ただ黙って私についてくればいい。すべて手配済みね」

「だからそうはいかないんだって！」とオレは逆切れして声をあげた。「こっちにも都合つてものがあんだ！ それにおっさん、あんたどこの人かしらないけど、この国には警察つてもんがいるんだよ、そうまっぴるまから、やすやすと誘拐されてたまるか！」

するとどこから、オレの動体視力をはるかにこえる速さで何かが顔のまんなかめがけてとんできた。オレはすばやく戦意を喪失し、仰向けに倒れて出血した鼻を両手で押した格好のまま、男たちに店の外までずるずると引きずられていった。そのときオレが最後に見たのは、コンクリートの床に散らばった粉々に砕けた食器の残骸と、奥の壁に飾つてあるあのいやらしい色をしたオレの絵だった。

オレは病人が抱えられるようにしてやすやすと車に押し込まれ、車は何事もなかったかのように滑らかに滑り出した。いい車だ……チビの男がとなりに座り、オレの耳元へ直接話しかけてきた。

「……心配しなくていい。ちょっと暑いけど、とても良い所ね。あなた、気に入ると思うよ。でも、逃げても無駄。後ろは砂漠。前は海。砂漠には、よそ者大嫌いな、危ない人たち住んでるね。十歳の子供まで、みんな銃持ってるよ。海には一年中すごい風吹くよ。あっという間に沖へ流されて、船はみな木っ端微塵ね。風がない日は、本当に風吹かないよ。無風。どこにもいけない、でもそれだけじゃない、海には三千年の歴史ある海賊いるね。おまけに沖にはサメがうようよいて……」

「分かった、分かったから、もういいよ……」

「でも心配しなくていい。ちょっと暑いけど、とても良い所ね……」

「それはさっき聞いたよおじさん……」

「……すぐ慣れる。人間、何にでもすぐ慣れるよ。私、いろんな人見てきたからよく知ってる」

「……でもオレ、中国語しゃべれないっすよ」

「中国語、いらない。ただ穴掘ったり、荷物運んだりするだけだから」

旅から旅へ。オレは船に乗せられた。どこかの港でまた別の、本当にひどい船に乗り換えた。一言でいえば、それはさびだった。形からして普通の船のような流線型ではなく弁当箱のように四角くて、そして船全体が、まるでこんがりと焦げたみたいにさびで覆われていた。舷側には白い塗装が一面うろこのように浮いているばかりで船の名前も何も読み取れない。こんなスクランプ寸前の船がまともに大海原を移動できるとも思えなかつたが、一応はスクリューも舵もついているらしく、ちゃんと海を移動した。

中は外装よりもさらにひどかった。壁もさびて穴だらけ、扉はみんなちょうつがいがさびついて動かないか、取り払われてなくなっていた。波が打つたびに船体が軋んでキュルキュルとイヤな音を立てた。船客はオレのほかはみな中国人で、どうやら同じ場所で働くことになっている出稼ぎ人らしかつた。上半身はみな裸か、半そでのシャツ一枚だった。もちろん風呂もシャワーもない。夕方にスコールが降り出すと、みなデッキに出て雨に当たる。オレは最初は雨で船が沈まないものかと心配したが、やがてそういった、どちらか自分にはどうしようもないことは心配しなくなつていった。

船客たちは日中はずつとデッキの影に座り、アイロン台を大きくしたような、白地に水色の小さな水玉模様の台に向かってトランプに時間をつぶしていた。それは何というゲームなのかは知らないが、一回はあつという間に終わつてしまつ。単純なゲームに見えたがみんな夢中だった。よく見るとマッチ棒を賭けている。出稼ぎ先に着く前からそうやってまた新たな借金をふくらませているのだ。

日がな一日、オレは船尾にあるベンチで時間をすごした。船のまわりの連続的に変化していく景色や、船のうしろにできるゆるやかにカーブする白い航跡を眺めた。海はおおむね静かでどこまでも平らだった。

南へ行くにつれて海の色が明るいコバルト・グリーンへと変化した。気温はますます上がり、耐えられる限界を超えてまだ上がり続けた。

それまでオレがずっとそこで暮らしてきた陸地の塊は遠く背後にあつた。そこからどんどん離れていく気分は、けつして悪いものじゃなかつた。オレはこうやってしがらみを切り捨てながら生きていくタイプの人間なのかもしれない。それに、日本から遠ざかるにつれて、オレはそれまで自分が何に悩んでいたのか、はっきりと思い出せなくなつてきた。悩みというものは、人よりもその場所に取りつくものなのだろうか?……気温の上昇、日光の角度の変化、すべての物の色彩や影と明るさのコントラストの変化……それらの変化につれてオレの悩みは分解し、漂白され、意味を持たなくなつていく……

船の上の最大の気がかりは体を清潔にたもつことだつた。船には風呂もシャワーもなく、トイレもひどいものだつた。尻を拭く紙なんてしゃれたものもない。雨水がバケツに貯めてあって、それで流すだけだつたが、その水もすぐになくなつてしまつ。それに、そうやって流したもののがどこへ行くかというと、斜めのくだを通つて舷側から海へと流れ出るだけなのだ。その臭いたるや……言わずもがなだ。

だがそれにもなんとか慣れた。人間、何にでもすぐに慣れる……まったくその通りだ。おっさんは正しい。

ある日、いつもの船尾のベンチに寝そべつて布を張つた屋根の下から見え隠れする空を眺めて

いると、難しい顔をした五十ぐらいの小男が、全身から煙草のヤニの臭いを発散させ、さらに煙草をスパスパと吸いながら話しかけてきた。

「日本から来たんだって？」と男は言った。「出稼ぎかい？」

「いや。借金のかたに売られたんです」

「ほう。それじゃ俺と一緒だ」と男は言い、眉間に皺を寄せたまま海と空の境の辺りを睨みつつ、胸のポケットから指先でヒヨイと新しい煙草をつまみ出して火をつけた。男は花柄の短パンに空色のシャツというユーモラスないでたちだった。顔について言えば、その大きく開いた鼻から口にかけての辺りが博物館にある類人猿の復元模型のようで、眉間に常にある皺がその印象を強めていた。指の先と歯は煙草のヤニで黄色く染まっている。

「……博打だよ。あいつらもそうだけど、懲りないんだな……妻子もいるのによ、このザマさ……この船に乗ってるやつらは、おおかたはそうだよ。みな自分を借金のかたに入ってるんだ」

男はちらりとオレの顔を見ると、スパスパと忙しそうに煙草を吸いつつまた海の方に目をやった。

「奥さんと子供は無事なんですか？」

「ああ。弟の家に預けてあるから大丈夫だよ。もっとも、弟も俺と同じで博打が好きでね」

「弟さんは借金のかたに売られたりはしないんですか？」

「するよ。この前もどこか遠くで働かされてたよ」

「じゃあ二人とも遠くに売られたら、誰が奥さんの面倒を見るんです？」

「俺が売られてるときは、弟も慎重になるのさ……」

男はちょっと面倒臭そうに眉間をしかめた。それから男は煙草の先端の灰の形をさびだらけの手すりでちょちょいと整えてた。

「それで、俺が帰ると、弟がまた売られる。交代ってわけさ。それよりもあんたは？ まだ若そうだけど、独身？」

「そうです」

「ふうん。恋人は？」

「……」

「こういう船は初めて？」

「そうです」

「ショックだろうね。それとも、そうでもないか？……こうやって遠い国に旅をしてみるのも、気晴らしにはなるよ。俺は方々に連れて行かれたよ。でも、いくらなんでもこの船はひどいやね。あいつらの話だと、むかし福建省の小島と本土を結ぶ連絡船だったんだと。それが古くなつて、港につなぎっぱなしになつてたのを、船長が買い取つたらしいよ。船長はやり手だけど、いい加減なやつでね。船員の話だと、船の底のほうにはもう何年も誰も降りてないらしいね。扉がさびついて開かない部屋もあって、むかし喧嘩のあと行方不明になつたやつの死体がどこかに隠してあるかもしれないってさ……あんた、名前は？」

「ケンです」

「俺はジャオだ」

「ジャオさんはこの船がどこにいくのか知っています？」

「ああ、だいたいはね。中東、たぶんアラビア半島だろうな」

「行ったことあるんですか？」

「ああ、むかしね。でも、別にどこだろうと変わらないさ。暑かったり寒かったりするだけで、俺たちはただ言われたとおりに働くだけだし。ただ、海に近ければいいんだが……」

「海が好きなんですか？」

「いや」とジャオはむっつりとして言った。「商売だよ。地元の漁師たちと仲良くなると、余った魚なんかを分けてもらえる。それが商売になるのさ」

「へえ」

「中東だとアワビやナマコは無理だから、狙い目はフカヒレあたりかな。ヒレの形のまま乾燥させたパイツだと、小さくとも七十元にはなるだろう」

「くわしいんですね」

「元々はそれが俺の本業でね。フカヒレとかアワビ、ナマコなんかを干した乾燥物の取り引きでは、とにかく俺たち中国人が世界的なネットワークを持っているからね。俺もその中の小さな元締めだったのさ」

「売ったフカヒレはどこに行くんです？」

「香港さ。世界中で作られるフカヒレの上質なやつは、みんな香港にいく。あそこは世界の口だからね……」

二週間の航海のあと、ある日船は、雲ひとつないくせに背後から均等に吹きつける風にまんべんなく押されるようにして、どこまでも続く海岸線に沿って進んでいた。岸にはわずかな浜があるだけで、すぐ背後に茶褐色をした高く急な崖が、船の接近を拒絶するかのようにそびえている。船が進むにつれて浜はだんだんと広くなり、崖は少しづつうしろへと退いていった。やがて崖の中腹に灰色の背の高い建物の群れが身を寄せ合うようにして立ち並ぶのが見えてきた。船から全体を一望できるその町は、砂漠に溶け込むような鉱物的な色合いのせいだろうか、旧約聖書の時代からずっと変わらずそこにあったかのようだった。オレたちの乗ってきたボロ船さえもが遺跡のようなこの町を背景にするとどこか意味深な、神話的な美しさを帯びているように見えてくる……

オレたちの仕事はこの灰色の小さな町に港湾施設を作ることだった。サルタというのが町の名前だった。飯場は海岸沿いに建つ造りかけの事務所で、すでに先客の人夫たちがいた。そこで暮らしているのはオレを除けばみな中国人ばかりで、誰も現地の言葉は話せない……もっとも現地の言葉なんて話す必要はなかった、現地の人間と直に交渉することなどなかったからだ。週に一日は休みがあったが人夫たちの多くは飯場から出ようともしなかった。二重三重に借金を背負って酒を買う金もないのだ。そのかわり、誰かのおごりのときにはみんな樽のように飲んだ。

現場は飯場から目と鼻の先だった。オレがやったのはもう固まっているコンクリートの床の上にタイルを並べていく作業だった。そのあと職人たちがモルタルでタイルを固定するのだ。みようみまねでタイルの束を運び、ヒモを切ってばらばらにする。工事は計画より遅れているらしかったが急ぐ者など一人もなかった。一枚タイルを並べると隣の男と喋り出し、話にオチがついてから、また次の一枚をとりに行くといった調子だった。できるだけゆっくり働くとしているみたいだった。そして、リーダー格の一人がおもむろに立ち上がり、建てかけの倉庫の段差に腰をかけてタバコを吸いだすと、みな次々とそれに続いて仕事は自然に休憩となった。

その段差に座ると海がよく見えた。穏やかな海は太陽を反射して太刀魚の背中のように銀色に光っていた。ずっと沖のほうでは波が規則正しい間隔をおいて伸び、一定の方向へベルトコンベアのようにゆっくりと進んでいた。あの銀色の波の下のどこかにサメがいるんだろう……

日が沈むとオレたちは飯場に帰った。人夫たちが寝る部屋は細長い形をした大部屋で、コンクリートの床や壁や天井はできあがっていたが窓の穴にはガラスがなかった。工事用のランプが天井の隅に取りつけられていて、人が動くたびに長く伸びた影が床の上にゆらゆらと揺れた。みなひんやりとした床の上にじかに寝た。

食事はひどいものだった。噂によれば、本当ならもっといいものが食えるはずだという。だが人夫係が食事代からピンハネをしてるのだと。

「本当なら羊の肉が出たっておかしくないのによ」と、同じ船に乗ってきた中年の男が言った。  
「これならまだ船の方がましだったぜ」

食事が終わると寝る時間だった。みなそれぞれが自分のかどに麻袋を切って広げたのやぼろ布を敷いて横になった。ひとつチャーミングな習慣があった。みなが横になってしまふと、誰かが歌を歌いだすのだ。きっと故郷の歌なんだろう。一人が歌い終わると、また別の男が歌い始め、そうやって順番に歌っていく。他のものはそれを聞きながら犬のように体を丸め、歌が一巡したころにはみな自分の体の匂いを嗅ぎながら安らかな眠りについているのだった。

地元の漁師に聞いたら、サメなんてここじゃ誰も捕らないって話だった。もっとも、中国人の商人がこの町までフカヒレを買いつけにやってきたことが何度かあったらしい。でも彼らはその時に手に入るブツをすべて買い集めると去っていったのだ。

「だったら自分たちで捕るしかないね。うまくいけば大もうけできるよ」とジャオは言った。「ちなみに、オレの名前は漢字で鮫と書いてジャオって読むんだ」

非番の日にオレと鮫さんは漁師から借りた小さなボートに乗って旧い港から漕ぎ出した。穏やかな海は相変わらず銀色に光っていた。岸から目と鼻の先にある海面からぽつんと突き出た小さな岩を二人は目指した。その岩までの間は浅い海が続くと漁師たちから聞いていたのだ。

透き通った水の上から覗くと白い砂の海底までがよく見えた。小さなサメたちはオレたちのボートのすぐ下を、眠りこけながらゆっくりと泳いでいた。隙だらけの小さなサメに狙いを定めて鉛を打ち込む。元手のいらない、子供にでもできそうな漁だった。でも地元の漁師たちの漁もこれと大して変らなかった。みな零細で原始的な漁をしていた。大きな船もないし、ちょっと沖に出たら強い風のためにアフリカかインドまで流されてしまう。そもそもここじゃそんなに魚を食べないので。おまけに魚を吃るのはみな貧乏人ばかりだった。

オレたちは三時間のあいだに小ぶりのサメを七匹捕まえた。鮫は鉛で手早くヒレだけを切り取ると、残りを海に捨てた。力を失った鮫はそのまま海底に沈んでいく……。

港に帰るとオレたちはヒレを草で作ったむしろの上に並べて干した。そして一匹だけ持ち帰ってきたサメをこれまた鮫が手早く解体し、浜辺で焼いて食べた。

「意外とうまいですね」

「だろ？ 幼いサメはうまいんだよ。これが大人になると、臭くて食べられないんだ。人間と同じさ……」

やがてだんだんと周囲の事情が分かってきた。最初に判明した事実は、オレたちが今いる場所が島だつことだった。アラビア半島とアフリカの間に浮かぶ、東西に細長く伸びた小さな島。その全体が砂と岩に覆われ、生えているものといえば龍血樹という、幹に傷をつけると血のように赤い樹液を流す樹だけだった。島はちょうど季節風の通り道にあって、一年の半分は強い東風、残りの半分は強い西風が吹き、その替わり目の数日だけ無風になる。ここでもまたオレを誘拐したおっさんが言ったことは正確だった。逃げてもまったく無駄なわけだ……。

干して乾燥させたフカヒレは、ある日業者が引き取りに来た。それは結構な金になった。それからは現場の方は金で休みを買うようになった。監視役と同僚たちに金を払えばことは済んだ。そのうえオレたちは漁にも出なくなった。現地の漁師からヒレを買入れることにしたのだ。フカヒレが金になることを思い出した漁師たちは、それまで漁の邪魔でしかなかったサメを仕留めることに夢中になった。

業者が再び島にやってきたとき、オレたちのところには漁師から買った大小さまざまヒレがそろっていた。香港のレストランでなら数万円の値がつく立派なヒレもあった。漁師からの買値はただ同然だ。二回目の売り上げは一気に十倍以上にはねあがった。

サメは海のそら中にウヨウヨしてた。漁師たちはそれまでブラブラしていた親戚たちも総動員してサメ漁に入れ込んだ。一時は持ち込みが増えたので買い取り資金が底をついてしまい、買

い値を下げなきやならなかつたほどだつた。漁師たちは不満げだったが、ヒレを買い取る者は島にはオレたちしかいない。

業者や売り値のことは漁師たちには秘密だった。漁師たちが直接業者と渡りをつけてしまえばオレたちの商売は成り立たないわけだから、この点はオレたちにとって死活問題だったわけだ。もっとも、そこまで欲のある漁師がいるようには見えなかつた。

とはいへ、かつてこの町は商業で栄えていたという。乳香の交易のためにはるか遠い国からも商人たちが隊列を組んでやってきていたというのだ。この町こそが旧約聖書にある《シバの女王》の古代王国の首都であったのだという伝説さえ囁かれていた。その話は考古学的な根拠に欠けるものだつたし、海をどうやって渡ったのかについては何の説明もなかつたが、町の人々はみんなその罪のない伝説を当然のことのように信じていた。

その夜もオレたちは酒場で飲んでいた。中国語の漫才を意味も分からずに眺めながら放心していると、やがて漫才コンビは舞台の袖に引っ込み、その後に音楽に合わせて舞台の上にあらわれたのは、キラキラと光る飾りに全身を覆われた中国人の女だった。美しい女だ……透き通るようにもみずみずしい肌を持ち、顔の輪郭が少しホームベースのように尖ってはいたが、上品で、しかも扇情的な目が微妙な顔のバランスを保っていた。大きな骨格にかぶせられた丸い肉はどこまでも女っぽく、肩に浮き出た鎖骨は砂漠の砂に埋もれたラクダの脛骨のように滑らかだった。

女はゆっくりとしたテンポでヨガのポーズを取り入れたインド風のダンスを踊り始めた。やがて女はおもむろに体にかけていたキラキラと光るショールを取って床に投げた。さらにその胸から肩をぴったりと包むインド風の黒いソーターを脱ぎ捨てると、金色と銀色の刺繡で覆われた胸当てをはずし、音楽に合わせてうしろへ放り投げた。

丸くたわわな乳房は闇の中で育てられたアスパラガスのように白く透き通っていた。乳首にはカーテン紐のような緑の飾りが取りつけてあって、紐の先には銀色の小さな鈴が下がっていた。女が両手の指を体の前で組み合わせ、それを前に突き出すようにしながら体をゆっくりと左右にゆすると、女の乳房は水のように弾みながらユラユラと揺れた。

やがてその運動にはさらなる方向と力が加わった。波間に漂う舟のような乳房と飾りの運動は、ブランコのように振れが増して、やがて半円を描き始めた。

にぎやかだった酒場の中は、いつの間にかシンと静まりかえっていた。そこにいる男たち全員が、女の胸先にぶら下がる銀色の鈴の動きを固唾を呑みながら目で追っていた。いつのまにか、女の胸の部分だけがスポットで煌々と照らし出され、周囲は暗闇の中に沈んでいた。オレもやはりほかの男たちとともにその銀色の鈴を追った。他のことはすべて忘れて私は運動の描く軌跡がひしゃげた半円から一つの完全な円となる時をじっと待っていた。

とうとう女の乳房の遠心力が重力に打ち勝つ時がやってきた。紐の先の小さな鈴が、その予兆に震えてチリンチリンと鳴った。

暗闇の中に浮かぶ白い乳房は、独立して伸び縮みする二匹の生き物だった。それは白くまぶしく輝いていて、じっと見ていると視界の白黒が逆転してしまうようだった……

ビンやグラスの割れる音があちこちから聞こえてきた。客たちが次々に頭をテーブルに突っ伏している……青島ビールの深緑色の瓶が横倒しになって転がりながら周囲のグラスを巻き込み、テーブルから落ちて次々と床の上で割っていくのが、オレの目には遅回しのフィルムのようにはっきりと見えた。それはまるで旧暦の正月を祝う陽気な爆竹の破裂のようでもあり、現実世界の明かりが一つずつ順番に消えていく、代わりにおとぎの世界が始まる合図のようでもあった。オレは首のつけ根の辺りにだんだんと強くなっていくだるさを感じた。目はずっと、白く光る二つの点に向けられているはずだったが、しかしもう何も見えなかつた。すでに辺りは真っ暗だ。世界が去ったあとに残されるのは暗闇だけなのかもしれない……乳房はどこだ?……あの光り輝く二つの乳房は?……探したけどどこにも見つからなかつた、どっちの方に行ったのかも分からなかつた。しだいに体が軽くなっていくようだった……首も、それに顔も目も、それらを動かす筋肉といっしょにどこか遠くに飛び去っていってしまったみたいだ……オレは途方にくれて、闇雲に足をバタバタさせた。足だけはまだ胴体につながっているみたいだった。足の裏を押し返してくる地面を感じながらオレはゆっくりとのぼつた。急な斜面だ。山肌は黒猫のように黒い。す

ぐ右手の谷を、オレが登っていくのとは逆の方向に、赤い溶岩がゆっくりと流れていた。行く手には山の黒いシルエットがそびえ立ち、その向こうに巨大な花火が上がっている。しかしそく見ると、それは沸騰して餅のようにちぎれながら飛び散る赤く輝く溶岩なのだ。黒い噴煙が輝く溶岩に照らされて赤黒く光っている。その上には、重そうな雲にふたをされてどんよりとした灰色の空がある。溶岩は山頂の方から流れてきて、途中の小高い丘にあたるとそれを迂回するように二筋に分かれて下へと進む。そのはるか下にはラップを平らに広げたような海が広がっている。海は凧いでいた。どうやら島の頂上にいるようだった。はるか遠くには大陸の海岸とおぼしき長い崖が見える……大きな群青色の船が一隻、平らな海の中に埋め込まれたように静止している……と、そのとき大きな銅鑼の鳴り響く音が耳元で聞こえた。

女の名前はリンといった。オレはリンと二人で暮らし始めた。リンは酒場では巫女のような謎に満ちた存在だったけれど、普段はやさしい姉のようだった。

ふとしたときにリンがみせる子供っぽさがオレはたまらなく好きだった。たとえばリンはアスパラガスの缶詰が好物で、中身を食べたあと、缶の中に残っているとろみのついた変な味のする水をさもうまそうに飲み干すのだ。きっと子供のころからリンはずっとそうしてきたのだろう。

リン自身が話してくれたことによると、彼女の父は台湾の有名な実業家で、母もまた有名な資産家の娘だった。リンは恵まれた環境の中でなに不自由なく育てられた。赤ん坊のリンに乳を与えてたのは、実の母ではなく乳母だった。実の母はいつもリンから遠いところにいた。リンにとって母は簡単に近づくことのできない怖い人だった。リンはテニスと乗馬とゴルフと水泳を習わされ、高校を終えると国立の芸大に入った。リンの父はリンの素行を調べるため探偵をつけた。リンの父はそういう人だった。しかし乳母がリンにこっそりとそのことを教えてくれるのだった。乳母はリンの父の会社で社長秘書、つまり父の秘書をしていた。実際は、乳母は父の秘書兼愛人だったのだ。リンが大学二回生のとき、自分で髪の毛をバリカンで剃って丸坊主になった。三回生のとき恋人ができた。彼は実業家で、父親と同じタイプだった。リンは彼のマンションにしばらく同棲したが、やがて彼では飽き足らなくなってしまった。

大学を卒業するとリンは若い建築家と結婚した。しばらくは幸せな日々が続いたけど、やがて夫が浮気を始め、リンは夫とケンカばかりするようになった。夫はリンに暴力をふるった。それからリンは酒に溺れるようになった。それまでは酒なんて一滴も飲めなかつたのだが。そしてさらに女友達からもらったマリファナを吸うようになった。リンは昼夜が完全に逆転した生活を送るようになった。

リンの心は荒んだ。急速に年老いていくような気がした。リンは物事に影響されやすくなり、本や雑誌の中には自分に向けて書かれた無数の暗示を見出した。そのうち、日常の中の出来事がすべて自分に向けられた暗示であるような気がしてくるようになった。街で知人と出会えば、彼らは他のみんなと示し合わせ（たぶん夫もその仲間だ）、私をからかうためにそこで待っていたのだと思った。理性は異議を唱えても、感情はまるで別の生き物のように勝手に動いた。毎日くやしさと憎しみがつのった。悪感情がいつまでも消えずに心の中で渦を巻いた。夫は最初、リンを手のつけられない子供のように扱っていたが、やがてリンを無視するようになった。

ある日、リンは夫の書棚を探っていてマニ教について書かれた本を見つけた。リンはむかし父からマニ教の話をきいたことがあった。リンの父は台湾が植民地支配を脱したあの《光復》のあとに大陸から渡ってきたのだけど、彼の生まれた福建省の村にはマニ教の寺があった。子供のころ、その寺の境内でよく遊んだと父が言っていたのをリンは思い出した。リンはその本を自分の部屋に持ち帰り読み始めた。この世は闇に支配されている。私たち人間もまたほとんど闇からできている。だが小さな光のかけらが私たちの内部にはまだかすかに息づいている。私たちは汚れた肉体を否定し、戒律を守って自分の内部にある光のかけらを見出さねばならない……

その日からリンは肉が食べられなくなった。自分でもあまりに単純すぎたと思ったが、体がどうしても受けつけなかった。それからリンは秘数学にのめり込んでいった。秘数学やカバラ、靈魂の転移などについての本を読んで、「すべてはつながっている」という確信をリンはますます深めていった。剃髪。結婚。酒と薬……それら一連の出来事がたんなる偶然だとは思えなかつた

。すべてはつながっている……占星術の本にはこうあった。二月生まれ、うお座。酒や薬に耽溺する傾向。神秘を愛す。自己犠牲の精神……このころからリンは自分に与えられた運命や使命について考えるようになった。自己犠牲の精神とは何なのだろう？それを知ることが、自分の中に眠る光のかけらを見出すことなのだとリンは思った。

リンは町中にある小さなヨガの教室に一年通い続けた。最後にコブラとラクダのポーズができるようになったとき、リンは夫と離婚して高い山とダムに囲まれた尼寺に入った。そこで三年間修行をしたあと、リンは旅に出た。リンの興味の対象はいつの間にか自分の中に眠る光から他人の中のそれへと変化していた。中米、南米、アフリカ、東欧からロシアをぬけて中央アジア、そしてインド、ペルシャ、アラビア半島……あらゆる場所でリンは光の徴と出会った。リンは生きていくために、ときには商人になり、ときにはダンサーや娼婦になった。危険な目に遭うこともあったが、いつもなんとか窮地を抜け出した。リンはそれを、人の中の小さな光のかけらが自分を守ってくれたからだと考えた。そして、その果てしのない旅の中でリンは不思議なダンスを踊る能力を身につけた。

港が完成に近づくにつれ辺りは騒がしさを増していった。漁師たちが港の加工場に集まって話しているのをよく見かけた。挨拶しようと近づいていくと、みな急に口をつぐんで陰にこもった暗い視線を投げかけてくる。知恵のあるヤツが出てきて業者と直接渡りをつけようとしてるんだろうとオレと鮫はふんだ。工事が終ればオレたちはここを出でてしまうことになるかもしれないのだから、漁師たちがその後のことを考えるのは当然の成り行きでもあった。

そんなとき、思わぬ方角から悪い知らせがあった。現場の主任やその上司たちが、フカヒレの仕入れから流通までを一手にあつかう新会社を作ることになったのだという。オレたちは酒場でそのことを告げられた。そして、駐在員としてここに残って今までどおり、漁師からの買いつけや乾燥の作業をするよう提案された。そうすれば湾港工事とも縁が切れ、借金もちゃらにするというのだ。

ただ、流通については主任たちが自分で仕切ることにこだわった。主任はオレたちに正規の買い取り業者に紹介するよう迫った。

「もし嫌だと言ったら？」とオレが言うと、鮫がすくと立ちあがり、オレの袖をつかんで店の裏までオレを引っ張っていってこう言った。

「おい、ここは考えどころだ。やつらに逆らってもどうしようもない。今までやつらに歯向かった者は大勢いるけど、結局どうにもなりやしないよ。やつらのうしろにはヤクザがいるんだ。やつらが本気になったら、オレたちは簡単に殺されちまうよ！」

「だって鮫さん、あいつらオレたちにいくら払うつもりなのか分かんないですよ！オレたちの商売を横取りしておいて、駐在員だなんて、そんなものいくらでも代わりがきくんだから」

「だからもうあきらめよう……やつらに目をつけられたらおしまいさ！……ここじゃあもうかなり稼いだんだし、潮時だろ……どうせこうなっちゃあこれまでのようにはもうからないんだ、あいつらに全部くれてやろうぜ！……そしてまたさっさと別の場所に移って新しい商売を始めるまでさ……」

「鮫さんはそれでいいんですか！」

オレが引きとめても無駄だった。鮫はまた主任たちの所へ戻っていった。

その日からオレはもう現場には寄りつかなかった。主任たちもオレを追いかけてはこなかった。互いに縁が切れたってわけだ。自由になったオレはリンの「弟」としてすることもなく暮らした。リンの住む貸家はデコレーションケーキを思わせるかわいらしい姿の三階建てで、寝室は三階にあった。その部屋の床は布やクッションに覆われていて、まるで教会のような色ガラスの窓がついていた。陽が出ている間、部屋にはおもちゃや菓子を思わせる色つきの光が充満した。

オレたちはいつも昼すぎに起きると、食事もとらずに日没までの時間をカートを嗜んで過ごした。カートというのはこの国で合法的に売られている覚醒作用のある植物の葉で、これを嗜んでいると陽気になって、何を話しても面白くなるが、やがて意識が朦朧としてくる。ときどき鮫がやってきて現場や主任たちのことを話していった。夕食を食べるとリンは仕事に出かけ、オレは夜の町を散歩したり、勉強のため中国語のビデオをみたりして、夜中すぎにリンの仕事を終わるころ、店まで迎えに行く。

真夜中の道は、店をすこし離れると街灯もなく、辺りを照らすのは月の光だけだった。月のない日には星がよく見えた。雲なんてどこにも、その気配さえなかった。

季節は秋になり、やがて一年に二度しかない無風の日がやってきた。オレたちは波打ち際を歩きながら風の音が止まった不気味な空を見上げた。だが、夕方になって、陽が西の空に沈むことになると、もう緩い西風が吹き始めた。それは日を追うにつれてだんだんと強くなつていった。

世界の終りが近づいているわ、とある夜リンが言った。彼女は部屋の奥から何も書かれていない赤い紙が貼ってある瓶を持ってきて、カップに注いでくれた。風味の強い酒だった。それを飲みながら、よかろう、とオレは言った。それならばオレたちは世界の終わりを盛大に迎えてやろう。それからオレはリンに父の話を始めた。そしてそれまで何度も考えたことをまた考えた。結局のところ、オレにとって父とは何だったのだろうか？父がオレに残していった教訓とは何だったのだろうか？……話すにつれて酔いは深まっていった。やがてリンの姿も消えた。ウラジロやゼンマイの生い茂る湿った山道にオレは立っていた。山道といつてもふみわけ道で、人一人がようやく歩けるほどの幅しかない。道の両側には笹やウラジロなどの灌木が生い茂り、さらにその外側にはまばらな林が広がっているのだが遠くまでは見通せない。辺り一面に白い霧が立ち込めているのだ。その薄い綿のようなものはゆるやかな風に流れて濃くなったり薄くなったりするのだが一向に消え去ろうとはしない。霧の流れのおかげで灌木は露に覆われ、葉の裏側に常に何かを隠し持っているようなウラジロたちはときどき思い出したように風に揺れておいでおいでをするし、その丸まった芽の中に得体の知れない昆虫の仔を胚胎しているようなゼンマイは蜘蛛の巣のような白いベールに覆われて、わざとのようにじっと動かない。そして大人の掌ほどもある真っ赤なキノコがこちらをビックリさせるためにそしらぬ顔をして道の真ん中に立っていたりもする……。

綿のような霧は晴れるどころか、進むにつれてますます濃密になっていく。これがオレの心象風景なのだろうか……が、その霧がどうも煙くさい。じっさい、それが煙であることにオレはふと気づく。胡散臭いスモーク。進むにつれてそれは濃度を増してゆき、妖しさもますます強くなっていく。山火事？ こんな早朝に？ こんな人気のない湿った山の中で？

辺りは暗くなり、いつの間にか夜になっている。やがてオレは林の中に切り開かれた小さな広場に出る。その真ん中で火を焚いているのは鼻の曲がった男だ。あの男はきっとヤクザに違いない、魂を売るのにはうってつけかもしれないとオレは考える。男は小枝を手に持ったままぼんやりと夢見がちに焚き火にあたっている。オレが近づいていくと男はゆっくりをこちらに顔を向ける、するとそれは、まぎれもない父だ。イワナを釣ろうとして岩場から滑って死んだはずの父。幽霊になった父は体が膨らんだのか、いつも着ていたスーツは今の父には小さすぎてあちこちに皺が寄り、ウンカのような胡散臭さがそこから立ち昇っている。

ふと明るい光が射てきて、やがて森の上に最初の太陽が昇った。朝が来たのだ。森が目覚め、猿たちが甲高い声で鳴き交し合い、極彩色の鳥たちが呼びあう声をオレは耳元に聞いた。

「起きて」とリンの声がした。「急いで。ここから逃げるわよ」

何かが陽気に破裂する音が響いていた。起き上がって開け放たれた色ガラスの窓から外を見ると、町の彼方に火の手が上がっていた。その周囲が赤く照らし出され、ポンポンと威勢のいい銃声が聞こえた。肩にやたらと長い銃をかついだ男たちの黒い影が進んでいくのが見えた。誰かが背の低いロバに乗り、空に向かって銃を撃っている。

荷物をまとめていると鮫が階段をあがってきた。鮫は全財産の入ったカバンを抱えていた。タバコを忙しそうに吸いながら鮫は下の様子を話した。湾の飯場とフカヒレの加工場が地元の漁師たちに襲われ火をつけられた。そこで寝てた人夫たちはみな一目散に逃げてしまった。漁師たちは今、主任たちがたむろする酒場に向かっているらしい……。

オレたちは海に向かって歩いた。背後の崖のほうから強い陸風が吹いていて、細かい砂が壁を作りながら家と家の間を流れていた。建物の角には回りこんだ砂が積もって小さな山を作っている。その無駄な美しさ……オレたちは早足に古い港へと向かった。はしけまでやってくると、三人はぐらぐらと揺れるボートに乗り込んだ。麻布の下に荷物を入れ、もやい綱をといてボートを押す。するとボートはひとりでに岸を離れ、海流と風に押されて沖へと流れ出した。オレンジ色に光る砂の町が揺れながら遠ざかっていくのが見えた。やがてそれも砂まじりの風にかすみ見えなくなってしまった。あとは星月の明かりだけが頼りだった。猛烈な速さで移動する空気の塊に押されてボートがぐんぐんと進んでいくのが感じられた。

水平線の辺りで光っていた稻妻がこちらに近づいてきたかと思うと、やがて激しい雨になった。雷鳴がとどろき、原始生命誕生の夜もかくやと思われたその時、突然、音が途切れた。すりガラスを撫でるようなしゅるしゅるという音とともにオレたちは海を沈んでいった。くらげのように平べったい泡が重々しい音を立てながら体のすぐそばを浮き上がっていく。やがてごつごつした岩がところどころ赤紫の海藻で覆われている海の底に着地した。その辺りは海面からそう遠くないらしく、おはじきを思わせる美しい青色の光が激しく揺れ動く波に歪められ、鱗のような模様になって岩の表面を進んでいた。すぐ横には模様もなくただ真っ白なだけの美しい蛤が、じっと口を閉ざして横たわっている。一目でそれがリンだと分かった。鮫といえば……きっとサメになって泳いでしまったのだろう。オレはナマコになっていた。自由に曲がる体を曲げて自分を見ると、深緑色のこぼこした体に赤い星がいくつもついていた。それからオレは岩の上を這って体の動きを確かめた。それから少し不安になって、人間だったころのことを思い出そうとした。父の死、喫茶店、工事現場とフカヒレ……それらのイメージはすでにはるか過去の思い出のように遠く、暗く、深い海の底の色をしていて現実味がなかった。明日になればきっと思い出すにも苦労することだろうと思った。一週間もたてばすっかり忘れてしまうかもしれない……オレは黙りこくったままのリンに、タコにやられないよう砂の中にもぐって身を隠すやり方を教えてやろうとふと思いついた。